

西日本正教

西日本主教教区 宗務局

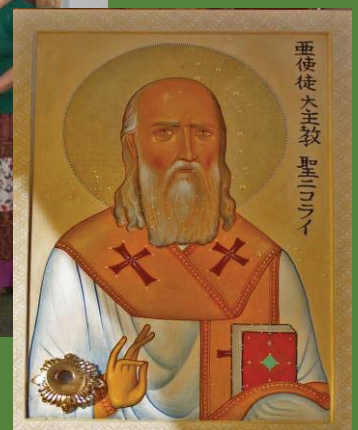
604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会 内

電話・FAX (075) 231-2453

郵便振替口座 01030-5-18547

No.139
Spring,2016





2016年2月11日(木・祝) 12:00~16:00 会場 西日本教区センター(京都ハリストス正教会)
 特別講演会「アトスの修道士たちとともに」

—正教の祈りと修道院の生活—(司祭パウエル中西裕一師)

同時開催 2月6日~10日 写真展「アトスの修道士」(写真家 ニコライ中西裕人兄)



今年の冬季セミナーは二月十一日(木・祝)、京都教会内の西日本教区センターを会場に、講演「アトスの修道士たちとともに」と、二月六日(土)から当日まで開催されたアトス修道生活の写真展で構成されました。

講師はここ十五年間、繰り返しアトスを訪問し、昨年末から年初にかけて三十三回目のアトス修道院滞在を終えたばかりのパウエル中西裕一神父(東京復活大聖堂教会)。展示された写真は神父のご子息の写真家、ニコライ中西裕人兄の作品です。お二人は二〇一四年九月、十五年六月、十二月、アトスに入山しアトス自治政府の首席大臣から特別の許可を得て、修道士たちの生活を密着取材しました。

パウエル中西裕一神父様



講演では会場に展示された写真と、二〇〇三年放映されたNHK制作のドキュメンタリーの映像の一部も縦横に用いて、言葉だけでは伝えにくいアトス修道生活が生きたと伝えられました。苦行を積み重ねて孤独に神と対峙するというのが、ありがちな修道生活のイメージですが、修道士たちの軽やかな表情がそれが如何に偏ったものであるかを如実に語ってくれます。肉は決して用いず、魚や玉子・乳製品も大祭日に限られ、ふだんはきわめて質素

ニコライ中西裕人兄



な、言葉で表現してしまえばほぼ「豆と野菜だけの食事」となりますが、ニコライ兄の写真はそれをよだれが出そうなほど美味しそうな、「神の贈り物」として再現します。同時にパウエル神父はそのよ



うな修道生活が、聖神の恵みに助けられて、人の創造のとき神に与えられた神の「似姿」(肖)へ向けての限らない変容の歩みを、人々に具体的なイメージとして与える役割を果たしていることを、聖師父たちの聖言を通じてわかりやすく語ってくれました。神の似姿への道を心躍らせて歩むこと、これは実は私たちクリスチャンすべての生き方でなければなりません。それがいかに人に混じりけのないまことの喜びを与えるか、修道士たちのポートレートの晴れやかなひとみの輝きが教えてくれます。

パウエル神父はアトス訪問を始めた頃、一人の修道士が聖山を去る神父の手を取って



「お前はなんてかわいそうなんだ、こんなよいところから帰っていかねければならないなんて」と真顔で言われたそうです。

閉会祈禱は聖堂に移り、アトスでは毎日行われている「バラクリシス」がパウエル神父によりギリシャ語で祈られました。

本セミナーには写真展にはのべ約百七十人、講演会には約百名が来場しました。また、掲載を依頼したところ大きく取り上げてくれた京都新聞の予告記事、また小まめに他教会、大学などへ配布したチラシを見て、三〇名以上の市民が参加しました。(松島記)



西日本に 新司祭二人誕生！

かねてより準備を進めていた新司祭叙聖式（神品機密）が、ダニイル府主教座下の御巡回・御司禱により執り行われ、西日本主教区は歡喜に包まれた。祈禱・祝典は京都生神女福音大聖堂・西日本教区センターで行われた。

ナファナイル小川師叙聖

一〇月一〇日（土）晩禱、一二日（日）主日聖体礼儀。ヘルヴィムの歌・大聖入後から叙聖式を執行。ダニイル座下の按手によりナファナイル小川輔祭を司祭に叙聖。十字架接吻後、ダニイル座下が祝辞を述べ記念品（聖像）を贈呈。参拝者は約六五人。教区センターに移り祝賀会。四国徳島・大阪・東京・小川家の親族はじめ多くの皆様と歓びを分かち合った。

グリゴリイ伊藤師叙聖

一〇月一日（日）晩禱、一二日（月祝）生神女庇護祭聖体礼儀。前日同様大

聖入後から叙聖式を執行。グリゴリイ伊藤輔祭を司祭に叙聖。十字架接吻後、ダニイル座下が祝辞を述べ記念品（聖像）贈呈。教区センターに移り祝賀会。参拝者は約七〇人。名古屋・半田・東京等多くの皆様が参集し歓びを分かち合った。

ナファナイル小川卓神父は西日本の教区司祭（徳島）、グリゴリイ伊藤慶郎神父は西日本の教区司祭（名古屋）に祝福された。二人の新司祭のこれからの活躍が大いに期待される。大阪の松田輔祭、府主教座下随同行の武井輔



祭・高橋副輔祭・田中神学生、奉事・聖歌隊・奉仕に御協力いただいた各教会の皆様ありがとうございました。（及川記）

新司祭よりご挨拶

司祭叙聖に臨み

司祭 ナフアナイル 小川卓

この度、一〇月一日に司祭に叙聖された徳島教会のナフアナイル小川卓（たかし）と申します。曾祖父は司祭ダニイル広岡侃、司祭パワエル勝又温平、父は長司祭グリゴリイ小川公という家系に生まれ、昭和四三年に大阪にて幼児洗礼を受け、約十三年、大阪府泉佐野市に住んでおりましたが昭和五五年一〇月、徳島の聖堂建立を機に徳島に移住、昭和六三年IT企業に就職（営業・技術支援・お客様サポートを担当）、平成九年一〇月に結婚し、平成一三年一〇月に大阪にて輔祭に叙聖、平成二七年七月の全国公会にて、前触れもなく司祭叙聖の打診があり、唯々、困惑するばかり。

え？いきなり？・・・一〇月に京都教会にて司祭に叙聖されるまで、何故、私？私で司祭という重責に耐えられるのか？これも神様の御意志なのかしら？という思いで叙聖に臨んだ次第でございます。

今まで父の背中を見てきたこともあり、司祭Ⅱ父親というイメージしかないですが、「謙（へりくだ）りと慮（おもん）ばか（り）の心を以て、自分のことよりも信徒のみなさんの事を第一

に！」という気持ちでお手伝いさせて頂きま
す。会社勤務しながら自給司祭として奉職さ
せて頂きますので、信徒の皆様には多々ご不
便をかけることもございますが、暖かい気持
ちを以てご支援の程、何卒、宜しくお願い申
し上げます。
(徳島)



司祭叙聖をうけて

司祭 グリゴリイ 伊藤慶郎

私は一九九八年の受洗に始まり、副輔祭祝
福、婚配式、輔祭叙聖のいずれも京都教会で
あり、このたび思い出深いその京都教会で十
月十二日に司祭に叙聖されましたことを、ひ
とえに神様の恩寵として感謝いたしております。

私は二〇〇四年の結婚を機に名古屋教会に移
り、二〇一二年からは輔祭として松島神父さ
まを補佐しておりましたが、松島神父さまの

大阪異動に伴い、今春より司祭として名古屋、
半田教会を管轄することになりました。

これまでの歴代の神父さまをはじめ信徒の
みなさんが培ってきた教会のよい雰囲気ながら
承しつつ、さらなる発展のために微力ながら
尽くしてまいる所存でございます。とはいえ、
仕事の都合で三月までは自給という立場です
ので、みなさまにはなにかとご迷惑をおかけ
するとは思いますが、ご配慮願えれば幸いです。
司祭としてこれから成長していけますよ
うに、みなさまどうぞご協力とご加禱くださ
いますようお願い申し上げます。
(名古屋)



最後の晩餐は

すぎこし
過越の食事だった？

「古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」(コリント後五・一七)

モイセイの時代、イズライリ人はエジプトで奴隷として虐げられていました。主は、モイセイを民の指導者にして約束の地へと向かわせようとしませんが、ファラオはこれを妨害しようとしてしました。そこで主は、エジプトに対して十の災いを臨ませました。その十番目の災いは、人間から家畜に至るまで、エジプトの「す



聖預言者モイセイ

べての初子を撃つ」というものです。主は、イズライリ人に子羊を屠り、家の戸口にその血を塗るように言われました。それを印として、その印がある家にはその災いは臨ませない(過ぎ越される)と言われました。そうして、エジプト人の初子を撃たれ、イズライリ人はエジプトから脱出しました。この出来事を記念して、主は毎年「過越祭」を祝い、「過越の食事」をとるように言われました。(出エジプト一・二章)

さて、イエス・ハリストスが弟子達と最後の晩餐(機密の晩餐)をとられた時のことです。共観福音書では、彼ら弟子達が準備するその食事が、「過越の食事」であると繰り返し述べられています。ハリストス御自身も「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。」(ルカ二二・一五)とおっしゃっています。

ところが、この最後の晩餐には、典型的な「過越の食事」とは異なる部分があります。四つの福音書から、この日が木曜日であることは明白ですが、日付を正確に記しているイオアン伝によれば、この年は土曜日が過越祭です(「特にその安息日は大事な日であった」イオアン一九・三一)。そのため本来はその前日の



金曜日の夕方に過越の食事がとられるはずですが、イエスと弟子達は金曜日の前日の木曜の夜に(「過越の祭の前に」イオアン一三・一)過越の食事をとったこととなります。(共観福音書には最後の晩餐が「除酵祭の第一日」に行われたと記されていますが、それについては様々な解釈があります。例えば、ブルガリアの大主教聖フェオフィラクトは「『除酵祭の第一日』とは木曜日のことであり、除酵祭の一日前という意味であ

る。というのも、無発酵パンは金曜日に食べられたからである。」と書いています。この説を確かなものとするのは、前日に人々が発酵パンを回収し、無発酵パンを用意する準備を始めるため、その日が除酵祭の第一日とも呼ばれていた、という説です。西方の学者で、次のように書いている方もいます。「分かりやすい考え方をすると、律法によって指定された日の前日は、『種なしパンの第一日』という名前を得た。もしその日に早くも家から発酵パンを完全に除くための準備が開始されていたのなら、それは不適當ではない。」

そして注目しなければいけないのは、イイススが「これは私の体である」と言って弟子達に与えたパンは、ギリシヤ語で「アルトス」であると記されていることです。「アルトス」とは発酵したパンのことを言いますので、無発酵のパンを食べるようにと規定されている過越の食事とは異なります。皆さんが御存知のように、カトリック教会が無発酵のパンを現在使っているのに対して、正教会の聖体礼儀では発酵したパンを使っています。

また、過越の食事では子羊を屠り食べるようになっていますが、最後の晩餐に

おいては、どこにも子羊についての記述が見当たりません。それから、過越の食事は一つの、ないしは二つの家族で食べるように規定されていますが(出エジプト一二・三四)、当たり前のことですが、イイススと弟子達は家族ではありません。また過越の食事では、過越の出来事について語って聞かせることになっていますが(出エジプト一二・二六―二七)、最後の晩餐にはそれもありません。

では、主が弟子達ととった食事とは何だったのでしょうか。それは驚くべき全く新しいものでした。確かにそれは過越の食事でした。しかしそれはもはや古い過越ではなく、新たな過越を記念するものだったのです。この新たな過越においては、犠牲の子羊は「傷のない子羊」(出エジプト一二・五)であるハリストス御自身です。ハリストスと弟子達は、主によって「わたしの教会」(マトフェイ一六・一八)と呼ばれた新たな家族を形成しています。そしてそれは、「わたしの教会」として今も私達に引き継がれています。私達信徒は一つの霊的な家族です。古い過越によつては、イズライリ人がエジプトから救われました。一方、新たな過越によつては、人類が悪、無知、罪、悪魔、そして死の奴隷状態から救い出さ



れます。

ハリストスとその弟子達は、彼らの祖先がエジプトから解放されたことを記念する契約(出エジプト二四・一―一八)を、

「新しい契約」(コリンフ前一・二五)によつて古いものとなりました(エウレイ八・一三)。ハリストスの流された血に基づいて、この新たな契約を立てられました。ハリストスは人間に対する全き愛から御血を流された訳ですから、この新たな契約は神様の愛に基づいたものです。

主日には必ず聖体礼儀が行われます。それは週の第一日であり、イウデヤ人達にとつては神様の万物の創造の第一日の記憶でした。しかし、私達クリスチャンにとつては、新たな創造の日の記憶です。この日を記憶することで、私たち霊的な家族である「教会」は、新たな生命(いのち)を生き始めます。(後藤記)

各教会ニユース

人吉正教会 聖堂修復成聖式

一〇月一七日(土) 夕方一六時半、ダニール府主教座下ご一行来堂。すぐに準備し、一七時より人吉生神女庇護聖堂にて晩禱。みごとな聖歌で生神女庇護祭晩禱を祈った(三二人)。夕食会は市内のタベルナ・ミズモト、参加者二六人で盛

会。
一八日(日)
朝九時半、府主教座下入堂式、三時課につき聖堂成聖式。堂内で祈り内周を聖水と香油で成聖後、聖堂正門前で十字行の列をつくり、聖堂外周をみんなで讃詞を歌いながら成聖した。
名古屋の廣石



淑子姉の指揮により主日聖体礼儀。十字架接吻のとき、ダニール府主教座下の祝辞・記念品贈呈(緒方俊一郎執事長)、山上勝美建築士・聖像画家白石孝子姉・ステンドグラス作家舛田良子姉に感謝状・記念品贈呈が行われた。
新たに成聖された集会室と境内で祝賀会を開催(四五人)。聖堂修復というものの、ほとんど新築に近い大工事。創意工夫、心血を注いで下さった建築士はじめ建設委員(教会役員)、白石先生・舛田先生、全国の皆様の応援



援なくして、聖堂の完成はなかった。
祝典には、東京・名古屋・岡山そして地元九州、鹿児島・熊本・福岡の執事長や信徒も参集。団結力と熱気にあふれた。
遠路駆けつけてくださったダニール府主教座下、神戸の後藤神父様、武井輔祭様・杉村神学生。聖歌譜作成に御尽力くださったマリア松島マトシカ、御祝・ご加禱をくださった全国の皆様、ありがとうございます。
(及川記)

京都生神女福音大聖堂（市有形文化財） 修復工事

昨年秋から執事会で協議を続けると共に、市および府の文化財保護課と工事内容・工期・補助金助成等について話し合いを続け、三月には市から、七月には府より補助金予算が確保できたとの回答が届き、七月二十六日（日）定例信徒総会・責任役員会において聖堂修復工事実施を全会一致で決議しました。

○工事予定箇所
仮設工事、塗装工事、内部（聖所内壁）補修工事、鐘楼工事、玄関廻り・窓廻り補修工事等（追加工事の可能性あり）

○施工予定業者
伸和建設株式会社（京都市右京区）

○工期
一五年九月十日～一六年三月末の予定

○総事業費合計約二千万円
〈京都正教会自己資金のほか、市補助金・府補助金〉

○聖堂修復成聖式予定
一六年五月二二日（日）
聖堂修復工事の無事完了へ向けて、皆様の御援助・御加禱をお願い申し上げます。

（及川記）

福岡 亜使徒聖ニコライ伝道所

五周年記念

一月二二日（日）伝道所成聖五周年記念前夜祭・夕食会、博多駅前ルートインホテルで開催。十人参加。楽しかったです。

二三日（月祝）聖体礼儀、祝賀会を開催、早いもので成聖五周年。かつて九州北部には北九州小倉・中津・長崎など各地に正教会の講義所（伝道所）がありました。それらが霧消して数十年、各地での家庭集会やホテルの一室を借りての祈禱集会をつづけながら、五年前、小さいながらも、ようやくわたしたちは定期的な聖体礼儀の行える伝道所を建設しました。この一歩が着実な宣教の波につながるように強く祈りましょう（一七人参加）。

（及川記）

露西亞兵士墓地祈禱（松山）



二〇一五年
一月三日、朝七時過ぎに徳島を出発、一〇時半に現地に到着、徳島からは司祭家族四名、高松から十川兄が参拝された、既に皆さんもお揃いで何時も手分けして

墓標の前にお花を供えて戴き感謝。

一時より長司祭グリゴリイ小川公神父様、司祭ナフアナイル小川卓、陪禱により、松山ロシア人捕虜九八名の記憶が為された。

又、長きに渡り保存会長を務めてこられた京口保存会長が体調などの理由によりご勇退、来年より菅田顕氏が保存会長に就任なさること。

（ナフアナイル小川記）

広島 原爆永眠者慰霊祈禱会

九月二三日(水・祝)広島平和記念公園にて原爆によって被災した方のためのパニヒダが水口神父様によって献じられました。松島神父様、私、後藤が陪祷し、広島信徒の方が中心に参拝されました。(後藤記)



神戸教会 バザー



一月二三日(月・祝)今年も神戸教会ではバザーが開催され、近隣住民の方々を中心にかつてない程多くの方が来場されました。物品販売の他、ロシア料理等の食べ物も販売しました。(後藤記)

名古屋教会 バザー

一月一日、名古屋教会では恒例のチャリティー・フードバザーが開催されました。好天に恵まれ多くの方が来会し、売り上げも好調でした。



た。ルーマニア、ロシア、レバノン、ギリシヤなど各国料理やパン、五平餅などが出品され、売れ切れ続出でした。(松島記)

大阪教会 バザー

一〇月二六日に、恒例のバザーが開催されました。今年も物品よりも食事に重点をおいたバザーとなりましたが、天高く広がる秋の青空のもと、たくさんの方々が会場はあふれました。(水口記)

福岡「聖歌 学びの会」



一月十一日(月祝)主日聖体礼儀後、昼食をはさんで、午後より「聖歌 学びの会」を实践。病欠などでめったにない少人数でしたが、明るく元気に主日聖体礼儀、八調の讃詞・ポロキメンなど基本となる聖歌を練習しました。二月以降も定期的な聖歌の学びをつづけていきたいと願っています。名古屋正教会の聖歌指揮者エレナ廣石淑子姉の懇切なご指導に感謝申し上げます(参加六人)。(及川記)

主教区活動のご案内

○教区センター開設記念「正教連続講座」

3月21日(月・祝) エフレム後藤師 9月19日(月・祝) グリゴリイ伊藤師
5月5日(木・祝) ゲオルギイ松島師 11月3日(木・祝) グリゴリイ伊藤師
7月18日(月・祝) ゲオルギイ松島師

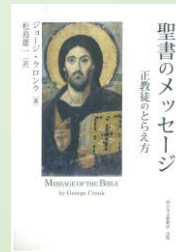
松島神父様が5月5日には「おいしいから！——キリスト教徒にとっての「食べること」と「食べないこと」——」、7月18日には「自己実現の逆説——したいことから、しなければならないことへ——」という題で講演されます。ぜひいらっしやって下さい。

○主教座聖堂 聖堂修復成聖式

場所 京都ハリストス正教会 生神女福音大聖堂 日時 2016年5月22日(日)

○教区会議 日程案

場所 大阪ハリストス正教会
日時 2016年6月17日(金) 教区司祭会議
2016年6月18日(土) 教区理事会／前晩禱
2016年6月19日(日) 聖体礼儀／教区会議



○出版物のご案内

・再販が決定いたしました！

ジョージ・クロンク著 ゲオルギイ松島雄一翻訳「聖書のメッセージ」頒布献金 1200円

トマス・ホプコ著 イオアン小野貞治翻訳「奉神礼」頒布献金 1400円

・出版準備中！

「教会史・聖書」ダヴィド水口優明・ゲオルギイ松島雄一翻訳 頒布献金価格未定

表紙のお話

「不朽体とイコン」の結ぶ縁 日本、ルーマニア、グルジア

ブカレストの聖ニコライ教会に日本の聖ニコライのイコンと不朽体が安置されていた。聖山アトスからルーマニアに運ばれた聖大ゲオルギイの不朽体がグルジアで描かれた聖ゲオルギイのイコンに嵌入された(名古屋、大阪)。名古屋教会の亜使徒聖ニコライのイコンもグルジアからの贈り物である。神の働きに国境はない。亜使徒聖ニコライよ、聖大ゲオルギイよ、我等のために神に祈り給え。

マリヤ松島純子(大阪教会)